

群 教 セ	F01 - 01
	平15.211集

体験活動を中心とした教育課程の構想

－ 「自己効力感を高める体験活動」の充実を目指して －

長期研修員 関口 佳克

《研究の概要》

本研究は、自己効力感を生きる力の基盤と考え、それを高めるための方法として体験活動に着目し、効果的・体系的・系統的な体験活動の構想を試みたものである。具体的には、県内の小学校で実践されている体験活動の調査・分析を通して、体験活動の実施状況や問題点、自己効力感を高める体験活動の特徴等を明確にし、それをもとに体験活動を中心とした教育課程編成の方法と手順や体験活動の全体計画、単元の活動過程等について考えた。
【キーワード：教育課程 自己効力感 体験活動 全体計画 学習過程】

主題設定の理由

今回の学習指導要領の改訂は、完全学校週5日制の下、各学校がゆとりの中で特色ある教育を展開し、児童に豊かな人間性や自ら学び自ら考える力などの生きる力の育成を図ることを基本的なねらいとしている。ゆとりとは、子どもたちがやっていることに没頭できる時間ととらえることができる。授業時数の減少、指導内容の精選という現実の中で、子どもたちが没頭できるものをどうとらえ、どう実践していくのかが各学校における大きな課題となっている。そしてその課題を解決するためには、各学校が教育課程について全職員で考え、共通理解する必要がある。しかし現状を省みると、ある一部の職員のみによって諸計画が作成されていたり、児童の実態や諸条件等を考慮せずに教科書会社より提示されたモデルを中心に作成されている場合も少なくない。改めて個々の教職員が、その職務、職責を真摯に受け止め意欲的に教育課程の改善に努めようとする意を強く持つとともに、そのための体制作りにも努めることも必要であると考える。

平成10年7月教育課程審議会より、学習指導要領改訂に関する答申が出された。その基本方針として「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること。」が提案され、具体的な例示として「道徳教育や特別活動等におけるボランティア活動や自然体験活動などの体験的な活動の充実」が挙げられている。また「自ら学び自ら考える力を育成すること。」が提言され、各教科及び総合的な学習の時間において体験的な学習や問題解決的な学習の充実を図ることの重要性が指摘された。さらにその他の方針も含めて考えると、各教科、道徳、特別活動及び総合的な学習の時間という教育課程を構成するすべての分野において、体験的な学習活動が不可欠なものであるととらえることができる。

以上のことから、教育課程の改善を目指し、体験活動を中心とした教育課程について考えることは意義のあることと考え、本主題を設定した。

研究のねらい

県内の小学校で実践されている体験活動の調査・分析を通して、教育課程の改善を目指し、体験活動を中心とした教育課程編成の方法と手順や体験活動の全体計画、単元の活動過程等を

考えるとともに、自己効力感を高めるねらいを持った体験活動の在り方について考える。

研究の手順

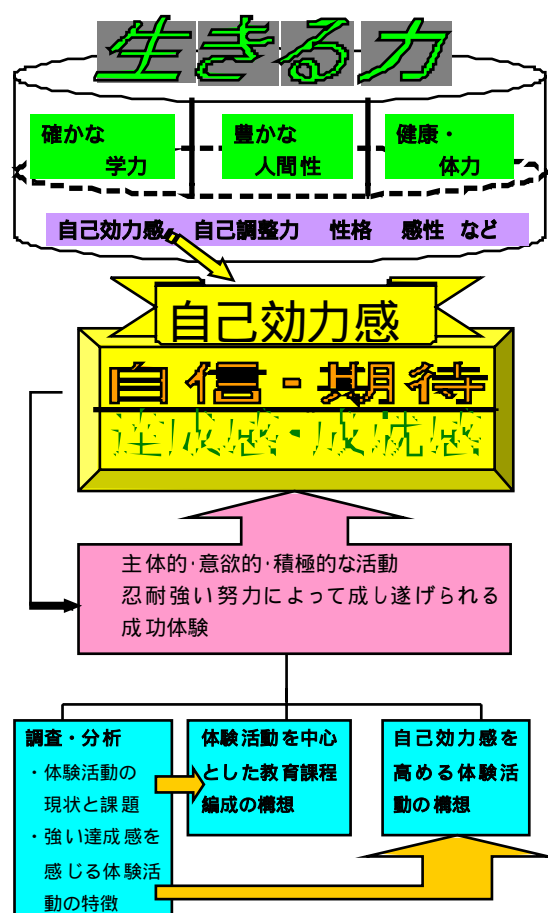
- 1 アンケート調査・集計から県内の小学校で実践されている体験活動の問題点及び教育課程作成・実施上の問題点を明確にする。
- 2 問題点の解決に向けた改善策を考える。
- 3 改善策を生かした教育課程編成の手順と方法を考える。
- 4 自己効力感を高めるねらいを持った体験活動の全体計画、活動過程（単元指導計画）のモデルを考える。

研究の内容

1 基本的な考え方

各学校では、改善に努め体験活動の実践に取り組んでいるが、効果的でない結果に終わっていることもある。体験活動にはそれぞれ固有の目的があるが、各体験活動を終了した時点で共通する子どもの姿として、子どもたちがさらなる自己の成長を願い、次の活動に主体的に取り組む資質を育成することが大切なことであると考え。そのためには、**児童が成功体験による達成感やそれに伴う自信を持つとともに、次の課題を感じたり、解決への見通しをイメージしたり、活動した結果に期待感を持ったりする必要**がある。さらに「**解決できる**」「**解決したい**」という信念を持つことが必要となる。児童の心の中に沸き立つこの感覚や信念を「自己効力感」としてとらえ、その獲得を目指すことが各種の体験活動に共通するねらいの一つであると考えた。体験活動を通し、子どもたちは日頃気づかなかった自分と出会うこともあるだろう。また、座学とは異なった困難に出会うこともあるだろう。今まで気づかなかった自分を意識しながら、困難にめげず忍耐強い努力によって何かを成し遂げたとき、より強い達成感や成就感を感じ、自分への誇りや自信とともに新しい自分を作り出し、自己効力感を高めることができる。そして、高まった自己効力感が支えとなり意欲的・積極的な活動を行い、その結果として達成感を感じることが、更なる自己効力感を高めることになる。この過程の繰り返しが生きる力を育成する一つの方法であると考え。

「自己効力感を高める体験活動」を中心として「教育課程」を構想する上では、県内の小学校での実態に沿った改善への取り組みを肯定的・支援的にとらえ、効果的・具体的な実践例として参考にしたい。多年に渡る積み重ねによってできあがってきた現行の実践を通して見えてくるものには、理論とは異なった確からしさと実際の子どもの姿が含まれていると考える。



2 体験活動を中心とした教育課程の現状と課題（新任教務主任へのアンケート）

教育課程を管理する立場にある教務主任の客観的な目で、各校で実践されている体験活動全体を評価してもらい、それを集計・分析することで、問題点を明らかにし改善の方向性を探るため、平成15年9月18日（木）に、新任教務主任を対象としアンケート調査を行った。結果は以下の通りである。

(1) 現状

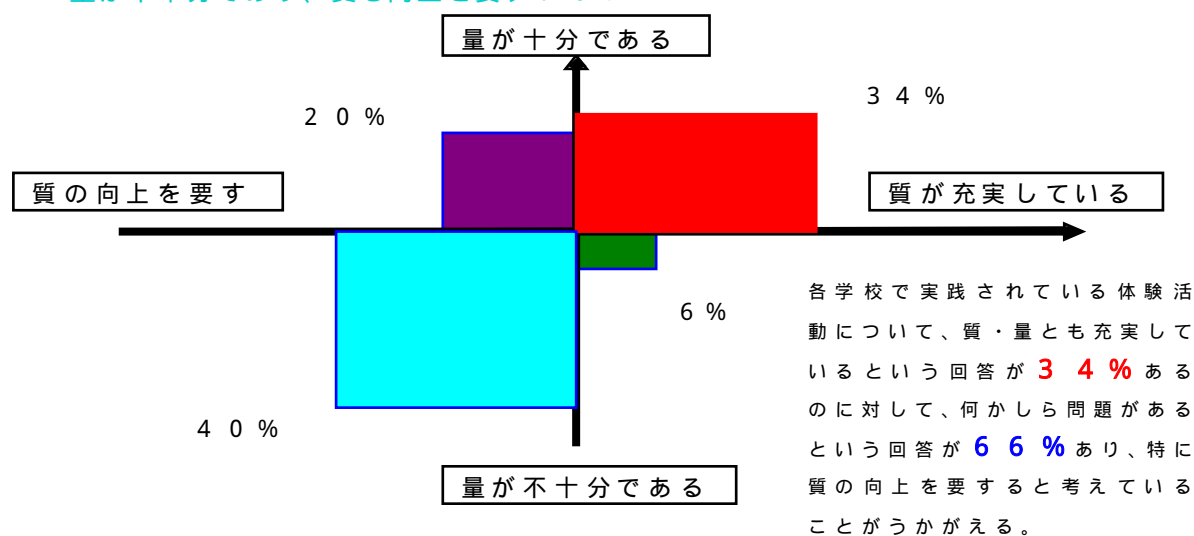
ア 体験活動の現状

質、量ともに充実している：34%

質は充実しているが、量は不十分である：6%

量は十分であるが、質は向上を要す：20%

量が不十分であり、質も向上を要す：40%



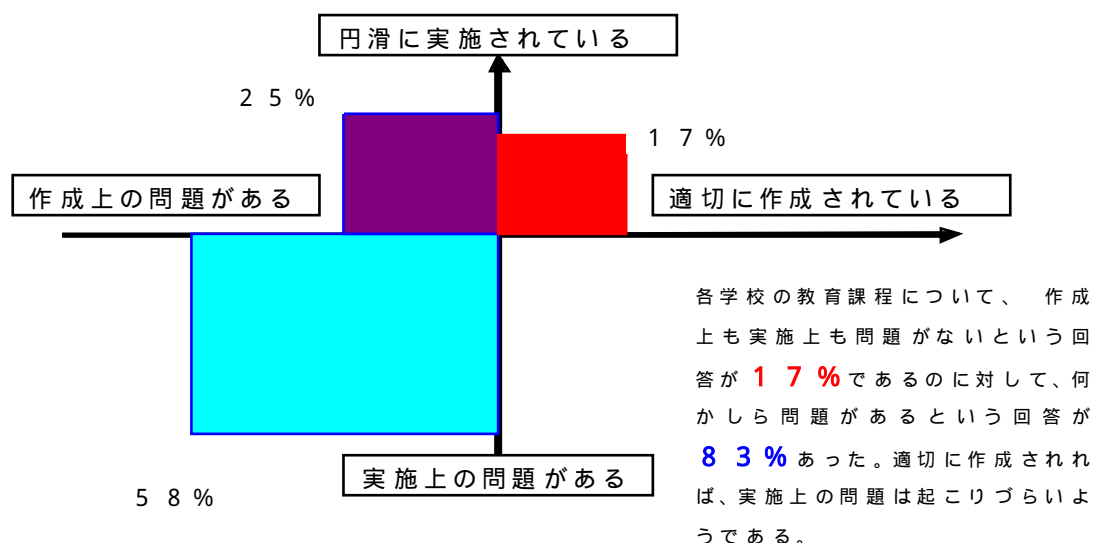
イ 教育課程の現状

適切に作成され、円滑に実施されている：17%

適切に作成されているが、実施上の問題がある：0%

作成上問題はあるが、円滑に実施されている：25%

作成上にも、実施上にも問題がある：58%



(2) 課題

ア 体験活動の課題

具体的にはどのような課題があり、それを改善するためにどのような方法が考えられるかについての回答を、三つの視点でまとめた。

< 目指す児童像・活動のねらいの視点 >

課題	改善策
<ul style="list-style-type: none"> ・ 体験活動に取り組んだ後の児童の感想に変化がないなど変容が見られない。 ・ 活動そのものが児童のどのような力になるのか見直す必要がある。 ・ 体験だけに重点がおかれ、どんな力を身につけたいのか見失っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体験への意義、興味付けの工夫を図り「なぜそれをするのか」の意義を明確にする。 ・ 教科や領域のねらいにそった活動であるか、あらためて視点を明確にして計画を立て直す。 ・ 目標、内容を再確認し、子どもに培いたい力を明確にしてからそれに合う体験を今までの実践の中から再構築していく。

< 系統性・計画性の視点 >

課題	改善策
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校全体の位置付けがないため他学年にはその目的も活動も見えてこない。 ・ 総合的な学習の時間において、地域、福祉環境、文化という学年ごとのテーマで課題解決しているが、各学年の系統が曖昧である。 ・ 学年による温度差がある。総合との絡みで単発に行われていることが多い。 ・ 教職員が変わると活動状況も変わってしまい、継続できない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 意図的、計画的に位置付け、学校目標のどこにどうつながっていくのか、計画段階で明確にしていく。 ・ 小委員会を設け、学年、教科等の系統化を図るとともに、一覧表を作成し全職員で共通理解を図る。 ・ すべての学年で体験活動を見直し、きちんと年間計画に入れていく。 ・ 実践したことを積み上げて研修する。

< 授業改善・その他の視点 >

課題	改善策
<ul style="list-style-type: none"> ・ 過去、学校で行われてきたものが検討されずにそのまま行われている場合が多い。そのため質、量とも形骸化され内容的なものが薄くなっている。 ・ 単に体験に終わり、それをもとに考えが深まらない例がいくつかある。 ・ 準備、実施時間等で多くの負担がかかる。往々にして楽しかったがねらいは何だったのかということになりかねない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 伝統的に取り組んできたこと、新しく試行したことを生かして、6年間でつけたい力を明らかにし、視点を定めて内容、方法等を検討する。 ・ 体験を通して個々の児童が考えることができるように学習全体の見通しをとらえるよう、学年に応じて手立てを講じていく必要がある。 ・ 活動を精選し、準備や実際の活動に十分な時間を確保する。また、必要なもの等の保管や手続き等が簡単になるよう工夫する。

イ 教育課程（全体計画・年間指導計画・単元指導計画など）作成・実施上の課題

計画段階での課題	実施段階での課題
<ul style="list-style-type: none"> ・ 例年どおり、あるもの（教科書会社が作成）を利用しようという雰囲気がある。 ・ 例年どおりという場合が多く、見直し、改善がな 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 適切な（見直しができる、子どもにかえる）評価がなされていない。 ・ 作成者と実施者が異なる場合、年度によっては活

<p>されていない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・担当者が一人で作成し、多くの教師が作成に参画していない。 ・地域の実態や教師の願いが十分反映されない。 ・発達段階と活動内容の整合性の見直しが図られていない。 ・ねらいが曖昧なためしっかりした指導計画にならない。 ・学校評価の結果がいかされない。 	<p>動状況に差が出る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作成された計画があまり利用されていない。 ・他の計画との整合性を調整するのが大変である。 ・形だけつくった計画もあり、計画通りに実践することが難しい場面もある。また実践後のふりかえりや訂正、補充など十分にされておらず、次年度にいかされない。
---	--

3 課題の解決に向けた改善策

(1) 改善に向けた基本的な考え方

個々の課題ごとに対処的な改善策を作るのではなく、抜本的な改善を図るための方策を考えたい。そこで学校マネジメントサイクル（計画 実践 評価 改善）の視点に立って課題が発生する原因と改善の方向性を考えると以下の三つが考えられる。

課題発生の原因	改善の方向性と考え方
<p>体験活動の改善が見送られている</p>	<p>視点を定め評価・分析をし、実践の結果を生かした具体的な改善に努める</p> <p>〔年度によって体験活動の指導者が変わってしまうことを考えると、実践活動を適切に評価・分析・蓄積し、次年度につなぐことが大切である。共通の視点を設け、多くの目で評価・分析することにより、評価の客観性・信憑性が高まり、体験活動の質的向上につながるようになる。〕</p>
<p>6年間を見通した体験活動の系統性に曖昧さがある</p>	<p>子どもにつけたい力や体験活動のねらいなどを明確にするとともに、発達段階を考慮し、体験をつなげるよう工夫する</p> <p>〔一つの成功体験から得られる達成感や成成感自信や期待につながり、主体的・意欲的・積極的な活動を促す。体験と体験に関連性を持たせることによって、一つの成功体験が自然な形で次の活動のエネルギーとなっていく。低学年においては、幼児期からの体験活動の経験をもとにしながら、生活科や学校行事を中心に児童の興味や関心、気づきを大切に体験活動となるように配慮したい。中・高学年においては、社会に目を向け多くの人々とのかわり得られるようにし、教科等での学習との関連づけも明確にしていきたい。〕</p>
<p>教育課程の編成が一部の職員にまかされる傾向がある</p>	<p>体制（組織や手順など）を整備し、全職員で共通理解したり、検討したりしながら教育課程の編成にあたる</p> <p>〔全体計画や年間指導計画などの諸計画の作成段階から全職員が積極的に携わることにより参画意識や協同意識が芽生える。積極的に携わるためには</p>

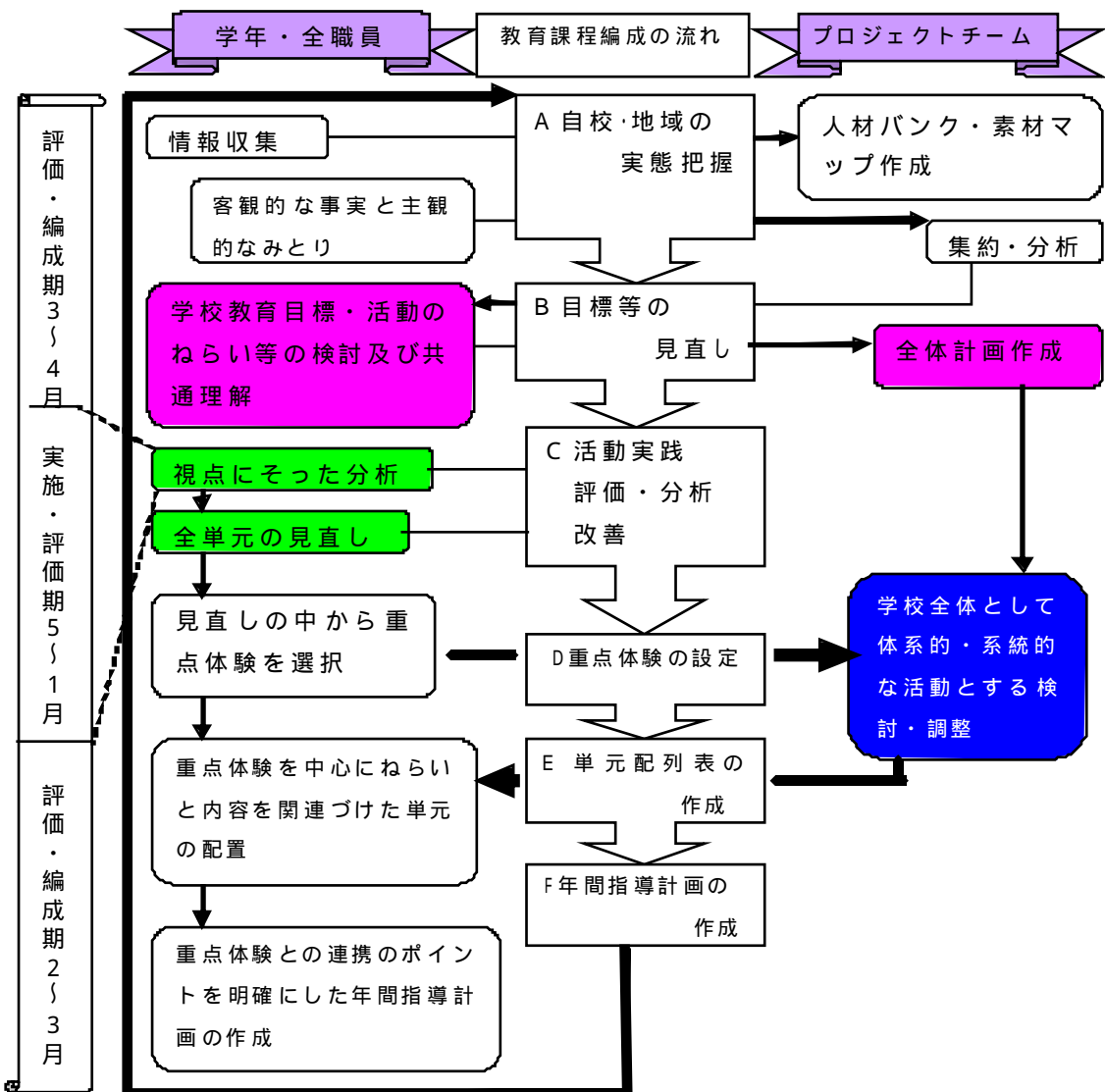
統括部門の適切な指示等により、各自の仕事が教育課程編成に効果的な役割を果たしているという自覚を持って進行していくことが大切である。]

(2) 改善の方向性にそった具体策

ア 体験活動の改善を図る教育課程編成のシステム

改善の方向性と考え方を基調とし、改善の流れとポイントを明確にした、教育課程編成のシステムを考えた。

(ア) 体験活動の改善の流れ（一年間）とポイント



ポイント

適切に組織されたプロジェクトチームの統括のもと、全職員で担当する職責を遂行する。

視点を定め活動実践について客観的に評価・分析し、活動の改善を図る。

発達段階を考慮し体験をつなげるように工夫する。

学校教育目標や目指す児童増の具現化に向け体験活動のねらい等を明確にし共通理解を図るとともに、体験活動の全体計画を作成する。

(イ) 改善のポイントの具体策

全職員での教育課程編成作業を統括する組織（プロジェクトチーム）

目指す児童像や体験活動のねらいを共通理解したり、全体計画や年間指導計画などの諸計画を作成したりすることを通して職員の参画意識や協同意識を高めるため、全職員での教育課程編成作業を統括する組織の在り方について考えた。

a 構成例

教務主任（リーダー）、各教科等主任、研修主任、学年代表1名（各教科等主任が兼ねることができる）

b 仕事の内容

教育課程編成に関する活動

- ・児童の実態調査、分析 ・保護者の意識調査、分析 ・人材バンク、素材マップ作成
- ・体験活動の全体計画作成 ・体験活動分析改善シート管理
- ・学校全体として体系的、系統的な体験活動とするための検討 など
家庭・地域・関係者との連携及び活動支援
- ・連絡調整、対応 ・広報活動 ・施設、設備等の維持及び運用管理
- ・危機管理体制確立 など
研修等の推進協力
- ・理念（学校教育目標、目指す児童像など）の見直し及び共通理解
- ・年間のまとめと評価 など

視点を定めた評価・分析・改善

実践した体験活動を深く掘り下げ構造的に捉えることによってその意味や意義を明確にし、児童の実態や学校の条件に応じたものであるかどうか分析・改善するために視点を定めたシートを作成した。

第 学年 体験活動(単元指導)分析・改善シート		記載者 ()			
活動名(単元名)	活動時期	領域区分	単元のねらい		
<体験の様子>					
ねらい	具体的な活動内容	児童の様子	備考		
<分析・改善の視点>					
各種行事 や総合的 な学習の 時間など、 学年単位 で行う直 接的体験 活動の実 施後、学 年会等で 適宜話し 合う。シ ートは学 年で保管 するとと もに、改 善委員会 に提出す る。	各教科や領域の目標や内容に合致している	悪い	やや悪い	ややよい	よい
	各教科：基礎的・基本的な内容の定着が図られている	-----			
	道徳：人間性の育成が図られている	-----			
	特別活動：社会性の育成が図られている	-----			
	総合学習：問題解決力の育成が図られている	-----			
	発達段階を考慮している	悪い	やや悪い	ややよい	よい
	低学年：幼児期からの経験をもとにし、興味や関心、気づきを大切にしている	-----			
	中・高学年：社会に目を向け、多くの人や物とのかかわりが得られるようにしている	-----			
	教師や子どもの願いが生かされている	悪い	やや悪い	ややよい	よい
	児童の実態を把握し、教育目標や目指す児童像の具現化が図られている	-----			

地域の特徴が活用されている	悪い	やや悪い	ややよい	よい
地形的特徴・歴史的特徴・産業的特徴・文化的特徴・人材的特徴などが活用されている	-----			
学習過程の適切な場で活動されている	悪い	やや悪い	ややよい	よい
導 入段階：単元を通して持続させうる意欲を喚起させている	-----			
追 求段階：追求の確かな見通しを持たせ、解答に根拠と自信を与えている				
ま と め段階：達成感を伴い、他の場面でも生かせる力として自覚させるとともに活用しようとする意欲を持たせている				
ふりかえり段階：他の教科・領域との連携をスムーズにさせ				
	知の総合化・実践化を促している			

<分析から気づいたこと>

~よいところ~	~改善すべきところ~
---------	------------

<具体的な改善点>

改善の視点	従来の活動・内容	改善後の活動・内容
各教科や領域の目標や内容に合致している		
発達段階を考慮している		
教師や子どもの願いが生かされている		
地域の特徴が活用されている		
学習過程の適切な場で活動されている		

<単元指導計画>

段階	学習活動・内容(体験活動)	支援・留意点
導入		
追求		
まとめ		
振り返り		

<他の単元や活動との関連(事前活動・事後活動・他領域との連携など)>

--

<年間指導計画等の作成の際に留意すべきこと>

--

<備考(外部講師等との連絡方法や安全の配慮など)>

--

- (ウ) 改善の流れの解説(体験活動を中心とした教育課程編成の手順と方法)とシート活用例
 (ア)体験活動の改善の流れの具体的作業と留意点について考えるとともに、作業を能率的に進めるためのシートを記入例も含めて考える。

	学 年 (担当職員)・ 全 職 員	プロジェクトチーム(体験活動改善委員会)
P6 体験活動の改善の流れとポイントに対応	<p>A</p> <p>< 自校の実態把握 ></p> <p>シート(シート)を用いて、学校規模・立地条件・子どもの特徴等について、</p> <p>・ “ 数値化できる客観的な事実 ” と “ みとり ” を適切に組み合わせ、自校の実態を把握する。客観的な事実の根拠となるものとしては、学力検査結果・保健統計・家庭環境調査・意識アンケート・備品台帳などが考えられる。</p> <p>< 地域の実態把握 ></p> <p>人材バンク・素材マップ作成のための情報を収集する。</p> <p>収集の方法として、各学級で子どもたちに人材バンクや素材マップを作成させることも考えられる。</p>	<p>シートを集約、分析し、学校教育目標等を検討する際の資料とする。</p> <p>収集された情報をもとに、人材バンク(シート)・素材マップ(シート)を作成する。その際、以下の点に留意する。</p> <p>人材バンクと素材マップを関連付けて集約する。(例：素材マップに該当、関連する人材バンク登録番号を記載する。)</p> <p>登録予定者に許可を得る。</p> <p>作成にあたっては、児童・保護者・地区役員・学校評議委員や他校・関係諸団体等の協力を得る。</p> <p>日常的に、児童が活用できるよう掲示等を工夫する。ただし、プライバシーに関する情報等については取扱いに充分注意する。</p>
	<p>B</p> <p>目標等見直し</p> <p>体験活動改善委員会(以下、改善委員会)より提示されたものをもとにして、学校教育目標や目指す児童像、体験活動のねらい等について話し合い、共通理解を図る。</p>	<p>自校把握の分析結果を全職員に提示する。</p> <p>話し合われたことをもとにして、体験活動の全体計画を作成する。</p>
	<p>C</p> <p>実践評価</p> <p>各種行事や総合的な学習の時間など、学年単位で行う直接的体験活動の実践後、視点に沿って評価し、体験活動分析・改善シート(前記参照)に記入する。シートは学年で保管するとともに、改善委員会に提出する。</p> <p>・ 計画に沿って体験活動を実践し、学年会等において適宜評価することをくりかえし、全体体験活動の見直しを行う。</p>	<p>提出されたシートを保管し、年間指導計画や単元配列表を作成する際の資料とする。</p>
	<p>D</p> <p>体験活動分析・改善シートの中から重点</p>	<p>各学年の重点体験について検討し、学校全</p>

重点体験の設定	<p>体験を選択し、実施時期を決める。体験活動は一定の期間に行うものと長期間にわたって行うものが考えられるが、各学期に一体験（一単元）を基本とする。</p>	<p>体として体系的・系統的なものとする。その際、以下の点に留意する。</p> <p>～わかる～</p> <p>運動会や6年生を送る会など、全校を挙げて行う行事やクラブ活動・委員会活動など、異学年の子どもたちが一緒に活動する場においては、参加の仕方や役割、活動を通して身につけたい力など発達段階に応じて分け、明確にすることが大切である。</p>
E 単元配列表の作成	<p>改善委員会の検討を受け、重点体験を中心に年間の単元配列表（シート）を作成する。その手順は概ね以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、重点体験のねらい、内容、実施時期、時間を明確にする。 2、関連単元（重点体験と連携させることができる領域内や他領域の単元）を洗い出す。（シート） 3、連携のポイントを明確にする。 4、連携のポイントを考慮して関連単元を配置する。 5、関連単元以外の単元を配置する。 6、全体的な視野で調整する。 <p>単元の配置にあたっては、学校行事等との関連を考慮して、1学期：12週・2学期：14週・3学期：9週を基調とするが学校の実態等を考え、弾力的に運用する。</p> <p>必要に応じて、教科や領域ごとの単元配列表（シート）を作成する。</p>	<p>～まとめる～</p> <p>音楽科や体育科、道徳などで目標や内容の大綱化が重要視されている。内容の欠落等がないよう学年間の連携を図りながら、各学年に適し、なおかつブロックとしてまとまりのあるものにすることが大切である。</p> <p>～つなぐ～</p> <p>各種全体計画や学校教育目標 学年教育目標 学級教育目標の流れを見ても分かるように、各活動が単独で存在することはありません。また、国語の言語に関することやコンピュータリテラシーなど6年間で段階的に多くのことを身につけようとする活動もある。ある活動が次の活動と結びつき、深化・統合されるようにすることが大切である。</p> <p>～くりかえす～</p> <p>大切なものをしっかりと身につけるためにはくりかえし活動することが効果的である。必要に応じて、学年内あるいは学年をこえて、くりかえし活動することで確かな力とすることが大切である。</p> <p>各学年の単元配列について検討し、専科教員の授業、施設設備の使用状況なども考慮して調整する。</p>
F 年計作成	<p>単元配列表をもとに、単元名・ねらい・主な学習内容・重点体験との関連・時間・評価規準・重点体験の項立てで年間指導計画（シート）を作成する。</p>	<p>教科部会等を開き、各学年で作成したものを検討する。</p>

<シート > 省略

学校規模・立地条件・子どもの特徴・地域性・学校施設設備などの項目が考えられる。

<シート> (人材バンク様式)

番号	氏名	住所	職業	連絡先 (tel等)	内容	素材マップ 関連番号
1	玉村太郎	玉村町2番地	農業	自宅	稲作に関する全般	2

人材バンクと
素材マップを
関連づける。
日常的な活用の工夫を図る。

<シート> (素材マップ様式)

番号	名称	区分	主な特徴	連絡先	人材バンク 関連番号
	玉村八幡宮	歴	地域住民の信仰を集め、年に二回礼大祭が行われている。	社務所	3
	水田	産	機械に頼らず、従来の方法で稲作を行っている。	玉村太郎	1

区分

地：地形的特徴を有している 歴：歴史的特徴を有している
産：産業的特徴を有している 文：文化的特徴を有している

<シート> (単元配列表)

単元配列表 ()年

重点体験 **関連単元** **関連単元以外の単元**

シート ・をまとめたものとなる	国語	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	道徳	学活	総合	行事
4月												
5月												

【重点体験について】

体験名(単元名)	教科等名	単元のねらい	活動のねらい	主な活動内容	留意点	時間

【関連単元について】

教科・領域名	単元名	単元のねらい	主な活動内容	連携のポイント

<シート> 重点体験と関連単元

「米」に関する体験を重点体験として、A小学校5年生の年間指導計画を例に考えたもの

月	重点体験の配列と主な活動	関連単元名及び目標・内容
4	年間のオリエンテーション <年間の活動予定・課題追求の方法・まとめの方法などを知ろう> 米に学ぼう 6.6 <社会科の学習から課題を作ろう>	
5	<米づくりの方法や工夫を調べよう> <米づくり名人に聞こう>	>(社) 米づくりのさかんな庄内平野 ~ 庄内平野の土地利用・気候及び米づくりとその問題点・解決の工夫について知る。~ >(国) 依頼の手紙、お礼の手紙 ~ 依頼状や礼状の書き方を知り、用件や気持ちが相手に伝わるように手紙を書く。~

	< 課題を追求しよう >	
6	< 種をまこう > 土の準備 種まき 芽だし	(理) 植物の発芽と成長 ~ 種子の発芽に必要な条件について考え、発芽には適当な温度、水、空気が必要であることをとらえる。また成長には日光や肥料が必要であることをとらえる。~
	< 田植えをしよう >	
	< 中間発表をしよう >	
7	< 稲を育てよう > 田の草取り 中ぼし	(体) 表現 ~ 色々な題材から表したいテーマを選び、動きを工夫しグループで表現することを楽しむ。~
8		
9	< 稲を守ろう > かかし作り すずめよけ作り 害虫駆除	(図) 心のスナップ写真から ~ 自分の体験やそれに伴う感情を造形で表すことに関心を高めて描く。~
10	< 収穫しよう > 稲刈り 乾燥 脱穀 もみすり 精米	(家) 作っておいしく食べよう ~ ご飯とみそ汁づくりの計画を立て実習する。~
11	< 課題についてまとめ、発表しよう >	(国) 読む人のことを考えて ~ 難しい内容を書き換える方法を知り、易しい言葉にしたり具体例を示したりして工夫する。~
12	藁や初穀を使って作ろう < 正月飾りや枕を作ろう >	(国) わらぐつの中の神様 ~ 登場人物の人柄や心の動きを読みとり、感想を深める。~
1	世界の米料理ショー < 世界の米料理とその国を調べよう > < 米料理を作ろう > < 調べたことを発表しよう >	(国) インタビュー名人になろう ~ 目的や内容を明確にし、相手に応じた言葉遣いでインタビューする。~ (国) 依頼の手紙、お礼の手紙【上記参照】 (家) 作っておいしく食べよう【上記参照】
2		(社) 情報と社会 ~ 情報によって世界が結ばれていることを理解するとともに、情報社会の中でどのように生きていけばよいか考える。~
3		(社) わたしたちの生活と自然保護 ~ 世界各地の環境の悪化とその原因について調べ、人々の国を越えた自然保護のための取り組みを理解し、自分たちでできることを考える。~
	一年をふりかえろう < 一年間をまとめ、自分の変容を知ろう > < まとめたことを発表しよう >	(国) わたしたちの学校生活 ~ 学校生活で体験したことをわかりやすく書いて相手に伝える。書いたことをもとに相手や目的を考えてスピーチする。~

囲い数字は授業時数

使用教科書：国語＜光村図書＞・社会＜東京書籍＞・家庭科＜開隆堂＞

<シート> 体験活動との関連を重視した国語科の年間単元配列

一つの体験をより多くの場面（教科指導等）で活かすことをねらいとして、重点体験を中心に教科等の単元配列を工夫する。ここでは5年生の国語科を例として年間の単元配列を考えた。

学期	月	総合的な学習の時間の単元配列と国語科の単元配列に関わる主な活動	従来の単元配列	新しい単元配列	優先配列単元の目標や内容	優先的に配列した理由		
12週	4	オリエンテーション(3) 米に学ぼう(66)	新しい友達 他	新しい友達 他	依頼状や礼状の書き方を知り、用件や気持ちが伝わるように手紙を書く。	ご協力いただく外部講師の方に依頼状や礼状を書く。		
	5	<米作り名人に聞こう>	依頼の手紙 他	依頼の手紙				
	6	海にねむる未来	海にねむる未来	海にねむる未来				
		言葉の研究レポート	言葉の研究レポート	言葉の研究レポート				
		わたしたちはこう考える 他	わたしたちはこう考える 他	わたしたちはこう考える 他				
	7	プラムクリークの土手で	プラムクリークの土手で	プラムクリークの土手で				
	14週	9	<追求したことをまとめ発表しよう>	あなたへ			あなたへ	難しい内容を分かりやすく書き換える方法を知り自分の表現に生かす。
一秒が一年をこわす 他		一秒が一年をこわす 他						
言葉を集め物語を作る		言葉を集め物語を作る						
ニュースを伝える 他		ニュースを伝える 他						
11		一秒が一年をこわす 他	一秒が一年をこわす 他					
12	藁や籾殻で作ろう(9) <正月飾りやまくらを作ろう>	漢語と和語	漢語と和語	登場人物の人物柄や場面・情景を叙述に即して読みとり、感想を深める。	わらぐつにこめられた登場人物の気持ちを実感する。			
9週	1	世界の米料理ショー(28)	言葉を集め物語を作る 他	言葉を集め物語を作る 他	目的や内容を明確にし相手に応じた言葉を遣う。	聞き取り活動に生かす。		
	2	<料理名人に聞こう> <調べたことを発表しよう>	ニュースを伝える 他	漢語と和語				
	3	一年をふりかえろう(4) <まとめを発表しよう>	大造じいさんとガン 他	大造じいさんとガン 他			体験したことを分かりやすく書き、相手に伝える。	自らの体験や変容を分かりやすく表現する。

< シート > (年間指導計画)

重点体験との関連という項目を設けることにより、具体的な体験場면을想起しながら指導を行ったり、体験したことを活かした指導を行ったりすることが大切である。

年間指導計画 < 国語科 第5学年 >

月	単元名	ねらい	主な学習活動	重点体験との関連	時間	評価規準 (A)	(B)
5	依頼の手紙、お礼の手紙	依頼状や礼状の書き方を知り、用件や気持ちが相手に伝わるように手紙を書く。	・依頼の手紙を書く計画を立てる。 ・教材から手紙の形式や言葉の使い方を理解する。 ・依頼状や礼状を書き届ける。	< 米作り名人に聞こう > や < 種をまこう > の活動で協力いただく外部講師の方に依頼状や礼状を書く。	5	相手や目的、意図に応じ、効果を考へて書いている。	相手や目的、意図に応じて書いている。
	形に注目、読み方に注目	形や読み方に注意して、4年生までに習った漢字を書く。	・4年生までに習った同じ部分を持つ漢字を、形や読み方、意味の違いという視点で調べる。		1	形や読み方に注意して4年生までに習った漢字を正確に書いている。	形や読み方に注意して4年生までに習った漢字を書いている。
<p>【重点体験】</p> <p>< 米作り名人に聞こう ></p> <p>・米作りの方法や工夫などについて、外部講師に聞く。</p> <p>< 種をまこう ></p> <p>・芽だし ・土の準備 ・種まき ・移しかえ</p>							

4 自己効力感を高める体験活動の構想

(1) 自己効力感を高める体験活動を構想する上での基本方針

子どもたちの自己効力感を高めるためには、子どもたちに強い達成感を感じる体験をさせることが大切である。学校教育目標や目指す児童像などの具現化に向けて、単元の目標や体験活動のねらいを明確にし、その達成のための活動を構想することが必要となる。つまり、ただ単に体験を行っただけでは、子どもたちの変容を促すことは難しいと考える。また、どんなに工夫された内容であったとしても、体験の結果としての変容を期待しているだけでは、折角の体験を活かしきっていないとはいえない。さらに、自らの変容が主体的に自覚されなければ、実際の生活の中で生きて働く力とはならない。以上のことから、「強い達成感を感じる体験」に「適切な自己観察」が組み込まれることによって、自己効力感が高まると考えられる。そこで、「強い達成感を感じる体験」と「適切な自己観察」を基本方針とし、アンケート調査・集計から具体的な内容等について考える。なお、アンケートは、平成15年10月24日(金)に平成15年度総合教育センター長期・特別研修員を対象に行い、体験活動への取り組みや体験活動による変容など児童の様子を直接みとり、感じる立場で、今まで指導してきた体験活動について評価していただき、121例の回答を得た。調査結果を念頭に以下に考えを述べる。

ア 「強い達成感を感じる体験」の特徴

アンケート調査の集計結果から「強い達成感を感じる体験」の特徴として、次の5点が明らかになった。

問題解決力育成と社会性育成のねらいをもった活動である

交流、社会奉仕、自然にかかわる内容の活動である

総合的な学習の時間を中心（総合的な学習の時間と他領域を連携させたものを含む）に行われている活動である

追求段階で行われた活動である

地域の人材を活用した活動である

以上の結果の中からねらいに着目し、「強い達成感を感じる」、問題解決力育成と社会性育成のねらいをもった活動に該当する実践例を分析し、特徴を観点別にまとめた。

【学年ブロック別の特徴】

低学年	中学年	高学年
生活科のまとめ段階の活動として、自然物を使った遊び道具づくりやお祭りの実、乗り物体験を行っている。実際のものづくりにしても、交流の場づくりにしても、 自分たちの力 で作り上げている。発達段階を考慮し、またその場で判断しなければならぬ場面があったりすることを想定し、 グループ での活動が多いようである。活動の際には、地形・産業・文化・人材と地域の様々な特徴を活用している。	総合的な学習の時間として行われている活動が50%、それ以外（総合的な学習の時間＋他領域など）が50%ということで、 各領域のねらいや内容を関連づけた体験活動 が多くなっている。特に商店街・昔の道具や生活・用水など社会科の内容での体験は効果的であるといえる。 体験の内容と学習過程の関係ではアイマスク体験や手話体験などの社会奉仕に関わる活動は、まとめ段階 川調べなどの自然に関わる活動は、導入段階 大豆の加工品づくりなどの勤労生産に関わる活動では、追求段階 昔の道具調べや伝統工芸品づくりなどの文化芸術に関わる活動では、導入段階・追求段階の活動が多い。 全体的には、 追求段階 の活動が多く(56%)、地域の人材を活用し、実演や直接指導を通して、 ものづくり の活動が行われている。	調べる 体験が多くなる。(67%) 自然に関わる活動では、地形的特徴を活用し、導入段階で課題設定に向けて、追求段階で課題解決に向けて、 体全体で感じる ことができる活動を行っている。 地域を調べ将来像を考えたり、自分にできることを考えるなどの交流に関わる活動では、導入段階で地域の人たちにインタビューしたことをもとにして課題を設定し、追求段階で課題解決のためにインタビューしている。また、行政機関をインタビューの対象やまとめたことの発信先としていることもある。

【内容区分別の特徴】

社会奉仕	自然	交流	勤労生産	文化芸術
総合的な学習の時間ではあるが、複数学年で同時に活動している。施設訪問や福祉体験など、社会福祉施設や社会福祉協議会など関係機関とかかわる活動である	川での活動など、活動場所がある程度広範囲になるため、 課題にあった具体的な活動場所と活動内容 について、自ら計画を立てている。また、安全性を考え、あらか	低学年では、交流することを一つの目的とし、そこへ向けて 自分たちで調べ、計画し、実施 している。中、高学年では、交流する中で地域の人たちの 願いや思い に気づき、よりよい地	ある程度 長期間 にわたり活動することで、その 過程や成果 が見え、完成を目指す意欲付けにつながるとともに、完成したときの喜びをより大きなものとしている。	社会科を中心とした、中学年での活動が多い。導入や追求の段階で、家族をはじめ、できるだけ 自分に近い地域の人 とかかわりをもっている。

ため、一つの体験を多くの学年で共有しようとする姿勢がうかがえる。	じめ設定された活動内容や活動場所を子どもたちが選択する場合もある。	域の姿とその実現のために自分のできることを考え、地域に向け発信している。	また、責任感を意識させることもできる。
----------------------------------	-----------------------------------	--------------------------------------	---------------------

【学習過程別の特徴】

導入段階	追求段階	まとめ段階
4年生以上の活動が多く、学年に関係なく 自然に関わる活動と文化芸術に関わる活動 が行われている。地形的特徴を活用した自然に変わる活動では、自らの 課題を発見 できており、産業や文化的な特徴を活用した文化芸術に関わる活動では、活動に対する 興味、関心を喚起 させている。	追求段階の体験は課題を解決するための活動であり、しっかりとした課題を持った活動であることは共通している。その方法としては、主に 調べることと作ることと行動すること (実際の場面に自分の身をおくこと)である。調べることは、その対象に対して 自分がどうかかわり、どう行動していったらよいかを考える ことにつながっている。作るとは、自分の内在する力を複合的に用いてよりよい完成を目指すことによって、 知の総合化、実践化を促すことと忍耐強さを養うこと につながっている。行動することは、自らの計画に沿って行動したり、その場にあった行動したりすることで、 計画及び計画を省みることの重要性の気づきや実際の生活の中で生きて働く力 につながっている。	低、中学年を中心に、生活科や総合の活動として、 人とかがわる ことを目的とし、そのかかわりの中で課題設定、課題追究の一連の活動を確実しながら、問題解決学習の集大成としている。

イ 「適切な自己観察」での留意点

子どもたちの活動と自信の変容を形成的にとらえることのできるポートフォリオは、追求活動で明らかになったことや課題を整理しながら、見通しを持って更なる追求活動を行うなど、子どもたちが主体的な学習を進める上では大変有効な手段である。そこでポートフォリオに自らの変容について省みる内容を加えることによって、ポートフォリオの一層の充実と活用を図りたい。

ポートフォリオの活用において

- (ア)できる限り小段階で自己観察を行うこと
- (イ)意図を持って計画的に自己観察を行うこと
- (ウ)自己観察の結果に対する評価・検討を行うこと

(ア)「できる限り小段階で自己観察を行うこと」について

体験活動がある程度の長期間にわたる活動であることや感受性の豊かな子どもたちは様々な場面で刻々と多くのことを感じ取ることを考えると、学習過程の各段階ごとに自己観察を行うなど、できる限り小段階の活動とする必要がある。また、子どもたちが参画するかたちで計画等がつけられている体験活動であるならば、計画作りの活動の中にふりかえりの場を設定することも必要となる。

(イ)「意図を持って計画的に自己観察を行うこと」について

常に単元や活動のねらいをを意識させ、課題や追求の結果に対して自分がどう感じるのか自分に何ができるのかをふりかえさせる意図を持って自己観察を行うことで、自己効力感の高まりにつながる。この自己観察を効果的に実施するためには、子どもたちに活動の事実や考えた内容を正確に記述する力が身につけていることが大切である。また形成的に自らの変容を確かめるためには、正確に記述したものを保管することが大切である。

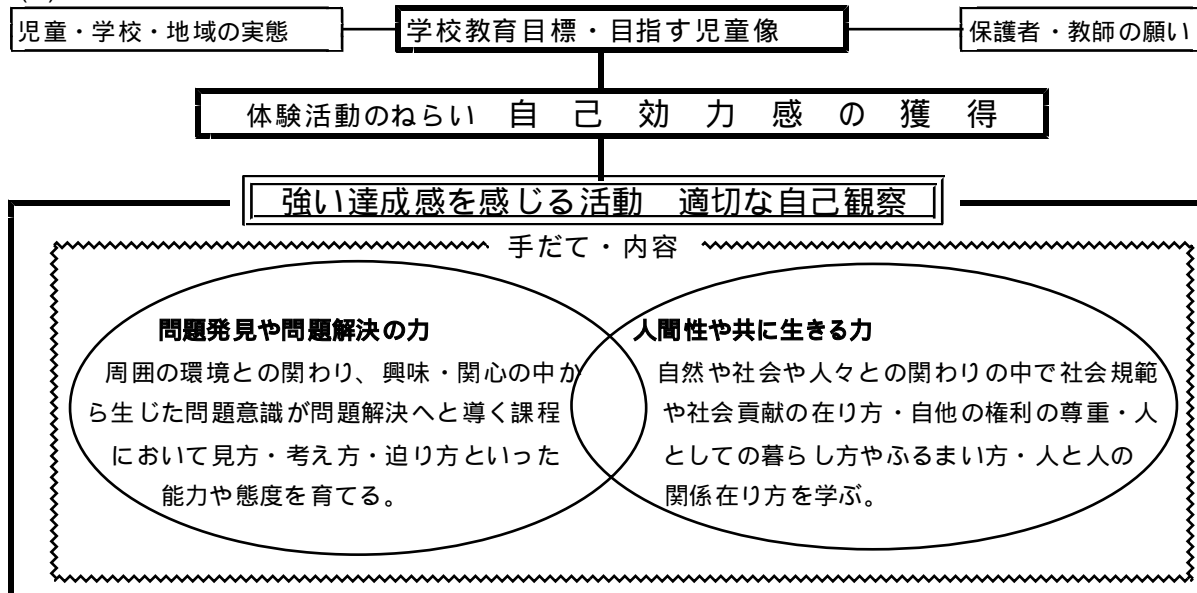
(ウ)「自己観察の結果に対する評価・検討を行うこと」について

ポートフォリオに書かれたことの評価・検討を通して、教師が子どもの学習の進み具合を把

握するだけでなく、その後の学習を方向付けることによって新たな活動を生み出すことができる。また、評価・検討を繰り返すことによって、自己評価力を高めることができ、自分の変容を的確にとらえることができるようになる。なお、ポートフォリオ検討の場としては、特設の場だけではなく、紙面上の対話や机間指導での相談、一斉指導なども考えられる。

子どもたちが今の自分を見つめ、理解し、自分にとって必要なことを考え、追求し、それを評価するという一連の流れの中で、結果としての変容ではなく、自らが自らを望ましく変容させるような体験活動とすることが大切である。

(2) 基本方針に沿った体験活動の全体計画



	低学年	中学年	高学年
重点 目標	今まで気づけなかった自分と数多く出会うとともに、それを自覚し、気づきの関連がつくよう書くことを中心として表現する習慣化を図る。	社会に目を向け多くの人とかがかわる中で、体験活動と教科等での学習をつなぐとともに、やり遂げることによって達成感や自己効力感を得る。	自分とのかかわりを明確にし、体験をふりかえり意味を考えることによって、自分のよりよい生き方や将来像につなげる。
工夫や 留意点	まとめ段階でのものづくりや交流の場づくり 様々な地域の特徴を活用するグループを中心に自分たちの力でつくりあげる	各領域のねらいや内容の連携 様々な内容に適した学習での体験 追求段階でのものづくり	調べる体験を通して願いや思いを知ることによる課題設定・課題解決 体全体で感じる体験
具体的 活動	自然物を使った遊び道具や飾り作り お祭り等イベントの開催 乗り物体験 など	大豆などの栽培及び加工品作り 伝統的な工芸品の使用・作製 地域調べ 昔調べ 福祉体験 など	福祉体験 福祉施設訪問 川調べ 米づくり 地域の将来像づくり及び発信 など

各教科	道徳	特別活動	総合的な学習の時間
各教科、領域との関連や「統合」型の学習活動により効果的な体験活動を取り入れ、実感的な理解や思考と	家庭や地域社会との連携を図りながら、ボランティア活動や自然体験活動など豊かな体験を通して、子ども	体験活動の内容や計画を全員で考え協力して実践する中で、ひとりひとりが直接的に人、社会、自然等に全	子ども自らが主体的な問題解決を通して体験的に学ぶことによってよりよく問題を解決する。豊かな人間性・自発性を育て日

<p>し知識の定着を図るとともに行動化や社会性に結びつけていく。</p> <p><指導の工夫> 体験で得た知識や力を教科学習に生かす。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・素材、データを教材化する ・体験をもとに文章にまとめ発表する。 <p>教科学習で得た知識を体験活動に発展させる。</p>	<p>の中の道徳性を補充・深化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・統合し、道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を育成する。 <p><指導の工夫> 体験活動にかかわる内容の資料や地域に取材した資料などを用いる。</p> <p>体験の時の思いを反映できるような発問や表現活動を取り入れ、多様な思いや考えを表す場をつくる。</p> <p>体験を道徳の時間の一部に位置づけ、実感的な理解を深める。</p> <p>体験につなげて道徳の時間を位置づけるなど活動した内容と道徳の時間の主題を相乗的に深める。</p>	<p>人格的にかかわることによって、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図るとともに、自主的、実践的な態度を育てる。</p> <p><指導の工夫> ・学級活動 学級・学年・学校全体で行う体験活動について学級として話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童会活動 学級で話し合ったことなどをもとに体験活動を企画、運営し、生活上の諸問題の解決に取り組む。 ・クラブ活動 飼育栽培、自然観察、奉仕活動などの内容を共通の興味関心とし、異学年集団で追求する。 ・学校行事 学校または学年を単位とし、全学年必修の5種類の内容について共通体験を行う。 	<p>常の実践に結びつける。</p> <p><指導の工夫> カリキュラム全体を方向づける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体的なテーマを掲げる ・活動の目標や趣旨がわかるよう名称を工夫する <p>活動の場や素材を地域の中に探る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人材リスト ・素材マップ <p>子どもの発達段階や活動の実態に合わせた系統的な題材配置とする。</p> <p>個別の課題を大事にした体験を中心にした上で、多領域との関連的な活動の場を設定する。</p> <p>投げかけや助言、情報提供、意義を再考する場づくり、教師と児童の協同活動など、体験的な追求を促す手だてや方策を持つ。</p>
--	--	--	---

(3) 基本方針に沿った活動過程

ア 活動過程を考える上での要点

自己効力感を高めるためには、子どもたちに自分という意識をもたせるように、単元や授業を構築することが大切である。体験活動の現状や強い達成感を感じる実践例の分析結果をもとに、活動過程を考える際の要点を以下のように考えた。

要点	アンケートの分析結果による裏付け
<p>問題解決学習の流れを取り入れる。</p> <p>例) 自らの力で課題を設定(発見・選択)し計画に沿って追求活動を行う。</p>	<p>問題解決力の育成を図る体験が強い達成感につながる。</p>
<p>社会性の育成を図るため以下の点に留意する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人とかかわる(交流する)機会を多くする。 ・話し合いを大切にし集団決定を尊重する。 <p>例) 人とのかかわりの中で課題を設定したり、追求したりする。</p>	<p>社会性の育成を図る体験が強い達成感につながる。</p> <p>地域の人材を活用することによって強い達成感につながる。</p> <p>交流、社会奉仕に関わる内容の活動が効力感を高める。</p>
<p>課題追求やまとめの活動をグループで行う。</p> <p>ポートフォリオを活用し、小段階でふりかえる。</p> <p>例) 活動の結果と取り組みに対する評価を行う。</p>	<p>体験活動に取り組んだ後の児童の感想に変化がないなど変容がみられない。</p> <p>ふりかえり活動の充実を図る必要がある。</p>

イ 自己効力感を高める問題解決的な学習過程

活動過程を考える際の要点に沿って、児童の具体的な活動を想定した学習過程を考える。

段階	自分とかがわる姿	強い達成感を感じる活動	適切な自己観察 (ポートフォリオの内容)	留意点
つかむ	今まで気づかなかった自分と出会う	五感を駆使して対象となるものを感じる 対象となるものの実態を把握する	<ul style="list-style-type: none"> 自分の活動や体験したことの内容 (事前活動との関連を含む) 活動や体験によって自分が感じたものとその理由 (自分像) 自分が設定した課題とその理由 (結果目標) 活動に対する意気込みや気持ち (取り組み目標) 	発達段階や内容に応じて予め教師が設定した課題や追求方法の中から子どもに選択させることもある
追求する	活動の計画	話し合いによる活動計画づくり	<ul style="list-style-type: none"> 自分(グループ)で設定した課題 追求に関すること〔方法、内容、手順、時間、場所、役割、留意点など〕 目指す活動の姿(めあて、目標) 	同様の課題をもつ子どもたちによるグループ活動 教師とグループによるポートフォリオ検討
	自分を確かめながら自分を知る	調べる つくる 行動する(実際の場面に身を置く) 中間発表 再活動、追活動	<ul style="list-style-type: none"> 計画に沿った活動の様子や結果 追求活動によって自分が感じたものとその理由(自分像) 中間発表によって明らかになったこと 自分ができたこと 自分ができなかったこと 再活動 自分がすべきこと 追活動 再活動、追活動によって自分が感じたものとその理由(自分像) 自分が最も大切にしたい(表現したい)ものとその理由 	困難に立ち向かいやり遂げる グループ活動 中間発表での参加者全員によるポートフォリオ検討
まとめる	表現の計画	話し合いによる表現の計画づくり	<ul style="list-style-type: none"> 自分(グループ)が最も大切にしたい(表現したい)こと 表現に関すること〔方法、内容、必要なもの、手順、役割、留意点など〕 	グループ活動 教師とグループによるポートフォリオ

			・目指す表現の姿（めあて、目標） 検討
	活動をまとめ自分を表現する	人とのかかわりの中で相手を意識しわかりやすく伝える	・表現したもの（ポイント） ・相手の反応、他の発表者との比較によって自分が感じたものとその理由（自分像）
			グループ活動 教師と個々の子どもによるポートフォリオ検討 知の総合化 実践化
ふりかえる	一連の自分を省み 自分を知り自分をつくる	蓄積したポートフォリオを中心に整理しふりかえる	・自分像の集約＝変容の確認 ・自分像の集約によって自分が感じたものとその理由 ・課題に対して具体的な場面で自分ができること 自己効力感の高まり ・今までの学習の中で自分の活動に生かしたものとこれからの学習に生かせるもの（事後活動との関連を含む）
			教師と個々の子どもによるポートフォリオ検討 知の総合化 実践化

まとめと今後の課題

1 研究のまとめ

県内小学校で実践されている体験活動に関する課題と改善の方向性を次のように考える。

課題	改善の方向性
<ul style="list-style-type: none"> ・体験活動の改善が見送られている。 ・6年間を見通した体験活動の系統性に曖昧さがある。 ・教育課程の編成が一部の職員に任されている傾向がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・視点を定め評価、分析をし、実践の結果を生かした具体的な改善に努める。 ・子どもにつけたい力や体験活動のねらいなどを明確するとともに、発達段階を考慮し、体験をつなげるよう工夫する。 ・体制（組織や手順など）を整備し全職員で共通理解したり、検討しながら教育課程の編成にあたる。

2 今後の課題

各学校の条件や環境によって、課題に対する改善の方向性や具体的な改善策も異なってくる。様々な条件や環境を考慮した、効果的な改善の在り方について考える必要がある。

<主な参考文献>

- ・文部科学省初等中等教育局 『体験活動事例集』 ぎょうせい（2003）
- ・宮川 八岐 編 『奉仕・体験活動の基礎・基本』 教育開発研究所（2003）
- ・西岡 加名恵 著 『ポートフォリオ評価法』 図書文化（2003）